

Title	動詞の語種からみた中世日本語における主格助詞表出の進行について
Author(s)	小林, 茂之,
Citation	聖学院大学論叢,18(1) ; 59-69
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=104
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

動詞の語種からみた中世日本語における 主格助詞表出の進行について

小林 茂之

The Evolution of Occurrence of Nominative
Particles in Relation to the Difference between
Sino-Japanese and Native Japanese Verbs in Middle Japanese

Shigeyuki KOBAYASHI

Theories of language change have been developed in recent years. They are modeled on the basis of language changes in English or other languages. In this paper I will verify some theories of language change based on the data of the development of nominative particle use in Middle Japanese.

At the beginning of the change, the occurrence rates of the nominative particle differed according to the kinds of predicate verbs, depending on whether they were Japanese native verbs or Sino-Japanese verbs.

I will show that the occurrence of the nominative particles in conjunction with Sino-Japanese verbs has increased along the line of the Frequency Linkage Effect (Tabor 1994). At the beginning of the changes the occurrence rates of the nominative particle differed according to the kinds of Sino-Japanese verbs, depending on whether they consisted of one Chinese character or two Chinese characters. But by the next early stage of the evolution, the difference has disappear.

However the occurrence of the nominative particles in conjunction with Native Japanese has increased along the line of the Constant Rate Effect (Kroch 2001), which predicts that a rate of new language forms should increase at a constant rate.

In the survey for this study I used Japanese commentaries on Chinese classics (*Shōmono*).

Key words; Frequency Linkage Effect, Constant Rate Effect, Nominative Particles, Sino-Japanese Verbs, Middle Japanese, *Shomono*

1 はじめに

古代日本語においては、主格助詞は従属節においては表出されていたが、主節においては表出されなかった。しかし、中世日本語では、主格助詞は主節においても表出されるようになった。この変化は、古代語から近代語に向けて、日本語の文構造が変化したことの一つの反映である。

格助詞が表出されないことが少なくなかった古代語においても、漢文訓読文では返読によって格助詞が表出されたと推測されている。もし、漢文訓読の影響が主格助詞の表出が進行する過程に及んだとすると、そのような漢文訓読の影響は、述語が一般の和語動詞よりも漢語動詞の場合に大きかったと予想される。

本稿では、中世日本語において述語が漢語動詞か和語動詞であるかによって、主格助詞の表出の進行過程に違いがあったことを抄物文献を資料に用いて明らかにする。

2 古代語における制約

2.1 日本語の主格形式

主格形式⁽¹⁾は、歴史的にはガ・ノ・無助詞(∅)の3種類がある。これらの勢力は、表1のように変化した。

中世以降は、主格助詞ガ・ノの表出が進行し、その中で、ガは主格、ノは属格に分化する⁽²⁾。他方、無助詞(∅)は江戸時代、近世以降は減少した。なお、表1では、主節・従属節の区別をせずに示したものである。古代語においては、主節では主格助詞は終止形終止文において表出されなかった。ところが、中世語においては、主節においても従属節と同様に表出されるようになった。この変化は、主格助詞の表出が、古代語の構文が変化した結果の影響を受けたのであって、主格助詞の表出そのものが古代語の構文を変化させたものではない。つまり、古代語では、主節と従属節との構文的違いが大きかったのだが、中世語ではそれまでの従属節が主節を吸収する方向で合流したのである。したがって、主格助詞表出そのものが変化したということではない。そこで、この制約は、述語の活用形に関する制約として、2.2でとりあげる。

表1：日本語の主格形式の史的変化

主格助詞	奈良時代	平安時代	鎌倉時代	室町時代	江戸時代
ガ					
ノ					
∅					x

2.2 述語の活用形における制約

表2：後続の述語の活用形に関する制約

主格助詞	奈良時代	平安時代	鎌倉時代	室町時代	江戸時代
ガ	非終止形		終止形・非終止形		
ノ	非終止形		終止形・非終止形		
〇	終止形・非終止形				

古代語においては、主格助詞は、主文において述語が終止形である場合には、現れなかった。

表2では、後続の述語の活用形に関する制約を示す。奈良時代には、活用語終止形は主格ガ・ノに後続することはなかった。一方、無助詞主格では、後続の述語の活用形に関する制約はなかった。

この制約は平安時代に引き継がれたが、鎌倉時代までには、活用語終止形も主格ガ・ノに後続するようになり、この制約は失われた(野村(1993))。

- (1) a. 年比ありける侍の、妻に具して田舎に去にけり。(宇治拾遺巻5)
 b. 三尺ばかりなる鯨の、ふたふたとして庭にはひ出たり。(宇治拾遺巻13)
 c. 藁一筋が柑子三になりぬ。(宇治拾遺巻7)

(1)は、中世初期の『宇治拾遺物語』の例である。終止形述語文において主格助詞「が」「の」が表出されている。

3 動詞の語種と主格助詞の表出化

格助詞が表出されないことが少なくなかった古代語においても、漢文訓読文では返読によって格助詞が表出されたことが指摘されている。⁽³⁾したがって、主格助詞の表出が進行する過程で、漢文訓読の影響が強い資料において、主格助詞の表出が進行したことは、十分予想される。

中世は学術活動が盛んな時代であった。その産物として、抄物と呼ばれる文献がある。これは、一般に漢文に対する口語性の高い言葉で書かれた注釈書である。以下では、『応永二十七年本論語抄』(1420)、『論語聞書』(1467)、『毛詩抄』(1539)の主語名詞句に後接する主格助詞と主題助詞の表出に関して、述語の語種の違いをみることにする。

表3：『応永本論語抄』における主語名詞句の助詞表出と述語の語種

述語	∅	が	は	の	合計(S)	が+の/S %	は/S %
和語	150	118	181	82	531	37.7	34.1
漢語一字サ	15	20	12	16	63	57.1	19.1
漢語二字サ	11	10	13	6	40	40.0	32.5
形容詞	38	10	13	10	71	28.2	18.3
形容動詞	19	7	23	10	59	28.8	39.0
名詞	44	8	294	4	350	3.4	84.0
あり	158	5	6	15	184	10.9	3.3
なし・ない	89	0	10	6	105	5.7	9.5
その他	26	5	78	3	112	7.1	69.7
合計	550	183	630	152	1515	22.1	41.6

3.1 『応永二十七年本論語抄』

『応永二十七年本論語抄』はその最初期の文献である（1420年書写）。その巻一～四⁽⁴⁾における主語名詞句に関して、無助詞∅⁽⁵⁾、主格助詞「が」「の」⁽⁶⁾、主題助詞「は」の表出率を述語の語種別に整理すると表3のようになる（中田（1965）の翻刻を資料に用いた。）。なお、「あり」「なし・ない」は用例数が多いので、独立した項目として立てた（以下の表も同様である。）。

表3では、漢語一字によるサ変複合動詞と漢語二字によるサ変複合動詞漢語一字サと漢語二字サとはそれぞれ（中田（1965）の翻刻を資料に用いた。）の略語である。和語と比べ、特に漢語一字のサ変複合動詞では主格助詞表出率（が+の/S）57.1%は和語や平均値よりもかなり高いことが明かである。⁽⁷⁾

3.2 『論語聞書』

国会図書館蔵『論語聞書』は、清原業忠の講義録である。天文4年（1535）の書写によるものであるが、大塚（1995）によれば、1467年頃に作成された抄物である。坂詰（1987）所収の翻刻を資料に用いた。

表4：『論語聞書』における主格・主題助詞の表出・非表出と語種

述語	∅	が	は	の	合計(S)	が+の/S %	は/S %
和語	61	172	172	54	459	49.2	37.5
漢語一字サ	5	12	13	6	36	50.0	36.1
漢語二字サ	13	13	8	5	39	46.2	20.5
形容詞	14	44	29	7	94	54.3	30.9
形容動詞	0	19	50	4	73	31.1	68.5
名詞	8	32	366	0	406	7.9	90.2
あり・ある	129	63	39	23	254	34.0	15.4
なし・ない	10	32	22	7	71	54.9	31.0
その他	19	21	79	5	124	21.0	63.7
合計	259	408	778	111	1556	33.4	50.0

表4では、和語動詞、一字漢語サ変動詞、二字漢語サ変動詞における主格助詞表出率は、かなり接近していて顕著な差がみられない。一字漢語サ変動詞、二字漢語サ変動詞の差については、頻度の高い漢語一字サ変動詞における変化が二字漢語サ変動詞に徐々に進行していったと推測できる。これは、Tabor (1994)によれば、Frequency Linkage Effects (頻度結合効果)と呼ばれるものである。「頻度結合効果」とは、簡単に言えば、頻度が高い言語現象は徐々にその頻度を増していき、ある時点で急速に普及することである。

次に、和語動詞文と漢語サ変動詞文との格助詞表出率についてみることにする。和語動詞文における主格助詞表出率が、漢語サ変動詞文に並んでいる。Tabor (1994)は、新しい語が、それが生起するコンテキストと同じ他のコンテキストで使われようになると説明している。つまり、漢語サ変動詞文で表出率が上昇した主格助詞は、他の和語動詞文においても同様に表出率が上昇したと推測できる。

3.3 『毛詩抄』

『毛詩抄』は、清原宣賢の講義録である。天文8年(1539)頃に作成された抄物である。巻一の部分を資料に用いた(倉石武四郎・小川環樹(1996))。

表5：『毛詩抄』における主格・主題助詞の表出・非表出と語種

述語	∅	が	は	の	合計(S)	が+の / S %	は / S %
和語	15	222	141	86	464	66.4	30.4
漢語一字サ	0	14	3	8	25	88.0	12.0
漢語二字サ	0	12	3	8	23	87.0	13.0
形容詞	3	58	38	15	114	64.0	33.3
形容動詞	1	11	7	5	24	66.7	29.2
名詞	13	53	370	0	436	12.2	84.9
あり・ある	10	92	20	19	141	78.7	14.2
なし・ない	6	46	26	6	84	61.9	31.0
その他	4	26	135	4	169	17.8	79.9
合計	52	534	743	151	1480	46.3	50.2

表5では、和語動詞、一字漢語サ変動詞、二字漢語サ変動詞における主格助詞表出率は、一字漢語サ変動詞、二字漢語サ変動詞の間ではほぼ同じである。漢語動詞における主格助詞表出率は87-88%とかなり上昇し、更に主題助詞の表出を合わせると、無助詞主語はない。これは現代語とほぼ同じである。

他方、和語動詞は、主格助詞の表出率は66%強と高くない。しかし、主題助詞の表出率が高いので、合計した主語の有助詞率は97%近い。和語動詞と漢語動詞とは主格助詞の表出率について異なる性質を持っていると考えられる。4節で更に検討する。

4 主格助詞表出率の進行

本節では、『応永二十七年本論語抄』(1420)、『論語聞書』(1467)、『毛詩抄』(1539)における和語動詞・一字漢語サ変動詞・二字漢語サ変動詞に関する主格助詞表出率の進行について検討する。

図1は、各資料間の主格助詞表出率の進行を年代順に並べて、動詞の語種別に折れ線グラフで示したものである。⁽⁸⁾

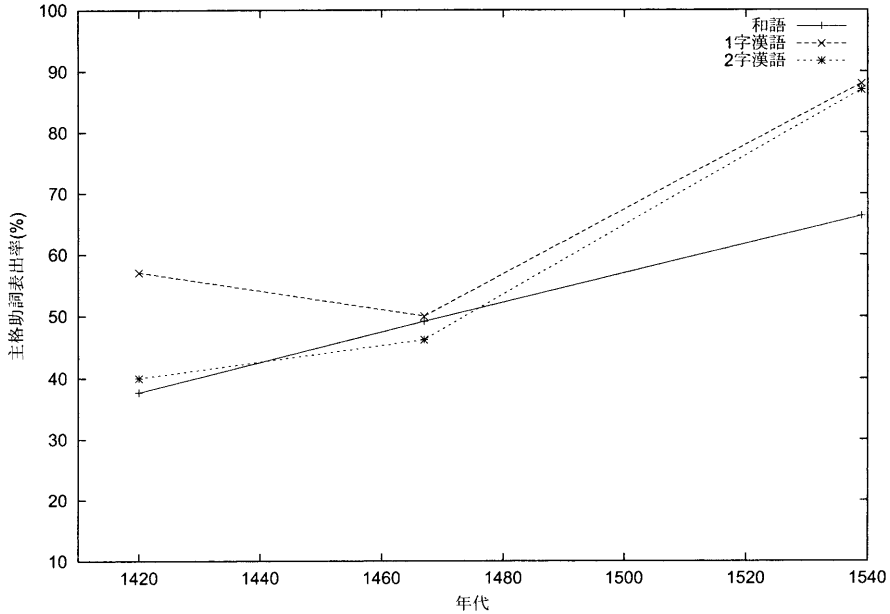


図1：和語動詞・漢語動詞における主格助詞

『応永本論語抄』の段階では、一字漢語サ変動詞における主格助詞表出率が二字漢語サ変動詞や和語動詞の場合よりも20%弱高い。小林(2005)で論じたように、一字漢語サ変動詞が主格助詞表出の進行を促進したとみられる。

『論語聞書』の段階では、一字漢語サ変動詞、二字漢語サ変動詞、和語動詞における主格助詞表出率が接近する。つまり、一字漢語サ変動詞、二字漢語サ変動詞の間に主格助詞表出に関して差がなくなったこと、漢語サ変動詞と和語動詞との間の差もほとんどない。これは、『論語聞書』(国会図書館本)が口語性の強いものであると指摘されていること(柳田(1998))と関連するかもしれない。

『毛詩抄』の段階では、一字漢語サ変動詞、二字漢語サ変動詞の間に主格助詞表出に関して差がないという状態を維持したまま、主格助詞表出が進行している。他方、和語動詞は、漢語サ変動詞と比較して主格助詞表出の進行の度合いが低い。

以上は主格助詞表出の進行の簡単な観察であるが、言語変化の一般的なパターンを表している。言語変化はS字カーブを描くことが指摘されているが(Tabor(1994)),『応永本論語抄』から『論語聞書』までは緩やかな進行であり、その後の『毛詩抄』に向かう急激な進行をS字の最初のカーブと中央のカーブとみなすことができる。これは、Frequency Linkage Effects(頻度結合効果、Tabor(1994))と呼ばれる変化パターンである。他方、和語動詞では、『応永本論語抄』から『毛詩抄』までほぼ一定の増加率で進行している。これは、Constant Rate Effect(定常進度効果、Kroch(2001))と呼ばれる変化パターンである。つまり、本稿でみた中世抄物における主格助詞表出の進行は、言語

変化の典型的パターンを示しているのである。

Tabor は、コネクショニスト⁽⁹⁾の立場から、脳の学習モデルとして言語変化を説明している。頻度結合効果や定常進行効果は脳の学習モデルから説明できる変化である。したがって、このような言語習得のメカニズムを想定すれば、中世日本語の主格助詞表出の表出は、特定の原因がなくても、言語話者の世代の交代に伴って進行していったと考えられるのである。

5 『応永本論語抄』『論語聞書』『毛詩抄』における漢語サ変動詞

本節では、『応永本論語抄』『論語聞書』『毛詩抄』に用いられてる漢語サ変動詞を語彙的に検討する。そして、各資料間の言語的な関係について語彙的な比較を通して考察する。

5.1 一字漢語動詞

はじめに、『応永本論語抄』における一字漢語サ変動詞のリストをあげる。

(2) 注：17，敬：4，死：4，生：4，変：3，撒：2，評：2，封：2，復：2，没：2，安：1，応：1，会：1，感：1，共：1，絶：1，撰：1，対：1，啄：1，通：1，転：1，反：1，報：1，崩：1，忘：1，滅：1，欲：1，利：1，論：1，哺：1，薨：1，(合計) 63

(2)では、「注す(る)」が63例中、17例を占めている。次の(3)に例をあげる。なお、例文の後の()内の番号は、中田(1965)のページおよび行番号である。

- (3) a. 鄭玄八仲弓 子夏ガ注ストシタリ。(005 - 03)
b. 兩人ノ弟子ガ注シタルト云儀也。(006 - 02)

続いて、『論語聞書』における一字漢語サ変動詞のリストをあげる。

(4) 安：3，信：2，注：2，和：2，サイ(口卒)：1，慰：1，逸：1，解：1，帰：1，朽：1，供：1，具：1，敬：1，謙：1，酌：1，生：1，奏：1，存：1，啄：1，悌：1，点：1，念：1，美：1，評：1，服：1，憤：1，欲：1，濫：1，禄：1，缺：1，(合計) 35

なお、「安(んず)る」と、『応永本論語抄』で多くの用例がある「注す(る)」は『論語聞書』においても用例があるが、(3)であげるように主格助詞が表出された用例がない。なお、例文の後の()内の番号は、坂詰(1987)のページおよび行番号である。

- (5) a. 例ガアレバコソ唐人ハ如此注シタレ也(61- 下14)
b. 鄭玄八倉卒ト注シタ(71- 上04)

そこで、リスト(4)のように、主格助詞が表出された用例として「信ず(る)」、「和(す)る」の用例をあげておく。

- (6) a. 向ガ我ヲハ信ゼイデカアランズラン(96 - 上03)
b. 和トハ心ガ和スル也(69 - 下04)

次に、『毛詩抄』における一字漢語サ変動詞のリストをあげる。

- (7) 注：3，註：3，題：2，愛：1，安：1，応：1，嫁：1，熟：1，称：1，朝：1，通：1，点：1，
伝：1，都：1，南：1，発：1，反：1，評：1，封：1，変：1，(合計) 25

「注す(る)」と「註す(る)」とは、リスト(7)で区別してあげたが、サ変動詞としての用法に大きな違いはない。次の(8)は、「注す(る)」の用例である。

- (8) a. 毛ガ一チ後ニイデテ獸ト注シタゾ。(124 - 03)
b. 毛葛ガ注ニ，興ノ志バカリ興也ト注シテ，賦比ヲ注セヌハ(27 - 10)

(8b)のガは、属格であるという解釈も可能であるが、主格としても解釈できる。

次の(9)は「註す(る)」の用例である。

- (9) a. 鄭玄ガ周礼，礼記，義礼ノ三註シテ(84 - 12)
b. キタナウ鄭ガ註シタト云テ(90 - 04)

(8)の「注す(る)」と(9)の「註す(る)」は、用法に違いがないので、「注す(る)」に代表させると、一字漢語サ変動詞25例中6例となり、『応永本論語抄』と語彙的に共通すると言える。

5.2 二字漢語サ変動詞

はじめに、『応永本論語抄』における二字漢語サ変動詞のリストをあげる。

- (10) 樹屏：3，出仕：3，相生：3，会合：2，具足：2，成就：2，相伝：2，他行：2，苦勞：1，
御出：1，辞退：1，執心：1，出入：1，崇敬：1，生長：1，早出：1，相違：1，相統：1，退
治：1，談合：1，知音：1，堂上：1，評論：1，変動：1，遍歴：1，奔走：1，揖讓：1，領
解：1，勞役：1，(合計) 40

次に、『論語聞書』における二字漢語サ変動詞のリストをあげる。

- (11) 出来：3，不審：3，成就：2，違例：1，悦喜：1，会合：1，学習：1，看病：1，帰服：1，
拳達：1，教訓：1，計会：1，結構：1，克己：1，罪過：1，出現：1，出生：1，賞翫：1，請
益：1，折檻：1，相違：1，相近：1，相見：1，評論：1，不諾：1，復礼：1，奔走：1，磨減：
1，約束：1，嗟嘆：1，(合計) 35

リスト(10)と(11)に共通した二字漢語サ変動詞がない。

次に、『毛詩抄』における二字漢語サ変動詞のリストをあげる。

- (12) 辛勞：3，成就：3，一変：1，下知：1，危座：1，後悔：1，御出：1，左右：1，嫉妬：1，
進御：1，成長：1，摂政：1，訴訟：1，対面：1，煩勞：1，匹グウ：1，表明：1，養育：1，
留守：1，(合計) 23

リスト(12)には、(10)または(11)に共通した二字漢語サ変動詞がない。したがって、二字語サ変動詞については、各抄物の内容や資料の範囲による個別性が強いとみられる。

5.3 漢語サ変動詞からみた資料間の関係

一字漢語サ変動詞の語彙については、『応永本論語抄』と『毛詩抄』とは近い傾向がある。柳田(1998)によれば、清原宣賢の『論語抄』は清原良賢のものに強く影響されているが、清原業忠の『論語抄』は宣賢ほど影響されていない。本稿で資料として用いた宣賢の抄物が『論語抄』ではなく、『毛詩抄』であるにも関わらず、類似性が高いことは柳田に一致する。また、本稿で用いた国会図書館蔵『論語聞書』が他の資料と類似性が低いことも柳田に一致する。

二字漢語サ変動詞の語彙については、『応永本論語抄』と『毛詩抄』とは類似性がないが、これ抄出の対象が異なるために語彙が異なる点が反映されているからであろう。また、『応永本論語抄』と『論語聞書』とは抄出の対象が同じであるにも関わらず、類似性がない。これは、抄出者である業忠の抄出態度が異なるためであろう。

6 結 語

本稿では、中世日本語における主格助詞表出の進行を抄物資料を通して検討した。漢語サ変動詞と和語動詞間で主格助詞表出の進行に違いがみられた。特に、一字漢語サ変動詞における変化は頻度結合効果(Tabor(1994))であると考えられる。また、和語動詞における変化は定常進度効果(Kroch(2001))であると考えられる。

Taborは、従来の言語体系の変化をコネクション主義者の立場から心理的プロセスとして説明している。本稿での分析によれば、このような理論は、中世日本語における主格助詞表出の進行についても適用可能であると考えられる。

註

- (1) 本稿では、主格を形態格に対する名称として用いる。古代語では、有助詞の主格名詞の他に無助詞の主格名詞も用いられたので、全てを含んだ名称に対して主格形式という名称を用いる。
- (2) 山田(1994)は、ガ・ノの主格、属格へ分化する過程に関する詳しい分析である。
- (3) Shibatani(1990)は、対格助詞「を」の表出について伝統的研究成果を整理し、その中で漢文訓読と文法化を対格助詞表出の進行の原因と述べている。
- (4) これは、称光天皇宸翰の部分である。
- (5) 無助詞の主語名詞句は、無助詞主格と無助詞主題に分かれるが、ここでは区別しない。この区別に関する問題は、小林(2004)で論じた。
- (6) 「の」は古代語では主格助詞として「が」よりも優勢であって、近世において、現代語のように属格専用の助詞となった。
- (7) 表3で、主格助詞表出率(が+/S)と主題助詞表出率(は/S)の合計は、和語動詞、漢語一字サ変動詞、漢語二字サ変動詞で70%台でほぼ同じである。Shibatani(1991)は、主題から主語への文法化を論じている。旧来の和語動詞が主題助詞の表出率が高く、漢語一字サ変動詞が主格助詞の表出率が高いことは、主語の文法化の進行段階を反映しているのであれば、興味深い。
- (8) 小林(2005)では、鎌倉時代の『平家物語』における主格助詞の表出について漢語動詞と和語動詞の違いをとりあげた。そこでは、漢語動詞が和語動詞よりも主格助詞の表出率が高いという傾向は観察

されなかった。

- (9) 理論的には言語変化は、言語習得の集積として説明される。コネクショニズムの立場では、言語習得は脳の神経回路網による学習のモデルとして研究されている。脳の神経回路網は、学習のモデルとして入力層、中間層、出力層の三層が設定される。この理論の概説書としては、甘利(1989)があげられる。

参考文献

- Kroch, A. (2001). Syntactic Change. In *Handbook of Contemporary Syntactic Theory*, pp. 699-729. Blackwell.
- Shibatani, M. (1990). *The languages of Japan*. Cambridge University Press.
- Shibatani, M. (1991). Grammaticalization of topic into subject. In Traugott, E. & Heine, B. (Eds.), *Approaches to Grammaticalization*, Vol. 2, chap. 5.1, pp. 93-134. Benjamins.
- Tabor, W. (1994). *Syntactic Innovation: A connectionist Model*. Ph.D. thesis, Stanford University.
- 甘利俊一(1989)『神経回路網モデルとコネクショニズム』、『認知科学選書』, 22巻, 東京大学出版会。
- 大塚光信(1995)「抄物概説」, 『中華若木詩抄湯山聯句抄』, 新日本古典文学大系, pp.557-578, 岩波書店。
- 倉石武四郎・小川環樹(1996)『毛詩抄詩経(一)』, 岩波書店。
- 小林茂之(2004)「外国資料からみた中世・近世初期日本語における主題主語の有助詞化」, 『聖学院大学論叢』, 17(1)。
- 小林茂之(2005)「中世日本語における主格助詞表出と漢語」, 『聖学院大学論叢』, 17(3)。
- 坂詰力治(1987)『論語抄の国語学的研究研究・索引篇』, 武蔵野書院。
- 中田祝夫(1965)『応永二十七年本論語抄』, 勉誠社。
- 野村剛史(1993)「古代語から中世語の「の」と「が」」, 『日本語学』, 12(10)。
- 柳田征司(1998)「清原業忠の論語抄について」, 『室町時代語資料としての抄物の研究』, 5.1章, pp.787-824, 武蔵野書院。
- 山田潔(1994)「『玉塵抄』の主格表現 「ノ」「ガ」の用法」, 『国語国文』, 63(7)。